

頰燒阿彌陀緣起詞書

頰燒阿彌陀緣起詞書

茲に詞書を登載する國寶原本の缺除或は不明の箇所は同じく光觸寺藏萬治三年の奥書ある摸本を主として傍註を加へた。同摸本製作當時既に原文の不明の箇所存せし如く、その複原はおそらく詞書筆者遊行寺第三十七世の解釋に歸すべきものと推せられる。猶ほ續群書類從卷八百四所輯「光觸寺頼燒阿彌陀緣起」或は同寺出版の小活字本があるが、共に摸本との相違は二三箇所にすぎない。いづれも萬治本に基くものと思はれる。この三本とも原本假名書を本字とした箇所が多いが原本の空白も幾字と確定し得ぬため大體に本字のまゝに傍註した。略緣起は新編鎌倉志に見え、又同寺に安政五年再版の木版本を傳へることを蛇足ながら附記する。

原本は兩卷とも卷首最も消抹激しく殆んど補筆によつて讀まるゝ程度で卷末へ行くほどやゝ原初の筆致を窺ひうると思はれ、繪の各段と並行する關係にある。唯下卷後半多少異筆（繪とともに）とも考へられるが、今は極く輕い疑問としてをくに止める。この原文に使用せられたためだつ變體假名を左記に摘出した。参考に資しうれば幸である。

而してその詞書の補筆は摸本に於ける複原と關係あるものの如く、現在知りうる原本の状態から見てその補筆がその下地となる文字を歪めて書起されたと思はるゝ點も多少存する。例へば上卷第一段（第一紙）七行目或は同十二行目（第一紙）の不明の箇處の如きが夫であり、又上卷第七段目最終行「海」下卷第一卷六行目（第一紙）「謁」の如き明かに謬と思はれる。又上卷第四段二行目の空白に比して副本等の補充は永きに失する。かく原文の空白と副本の複原の明かに一致しない箇所他にも二三を數へるが、疑問のまゝに注記する。

この印行が以上の如く不備ながら、原典批判には沙石集卷二上「阿彌陀利益事」が之に同一傳説として對比せらるべき位置にある事を特に留意せらるべきである。圖示するは下巻第四段九行目より十五行目に至る部分で保存良好にして原初と思はるゝ一例である。圖示の奥書は原本に於けるもの、副本には文首に「本云」とし、更に後出の副本奥書を添へる。(熊谷)

ソセスサケキカ
 常 志 次 所 意 背 前
 了 勢 々 々 々 々 々
 フハネニナツチ
 市 冬 祿 可 此 川 地
 志 志 々 々 々 々
 ユモムミマホヘ
 遊 色 尊 兄 満 浮 遊
 衆 々 々 々 々 々
 ワルリ
 王 弟 衆

上 卷

(第一段)

(第一紙)

夫佛果の廣海は皆一味なりといへとも
因位の悲願は彌陀ひとりすくれ一子
の慈悲は〔事ことに〕平等なりといえとも不
捨の光益は念佛のものを〔擲す〕悲願の
諸佛にすくれ給える事は擲するに極惡
最下の機をもてし〔光明〕の余の行を

きらふ事は尋て極善最上の法をもと

むる故也〔所〕の土を報法高妙に莊嚴

し能入の機〔是垢障覆深〕の衆生なりされは

終因感果の道理にもたかひ教理行果の

次第をもそむけりまことにこれ速疾頓滅

の〔志〕〔佛〕力不思議の祕術なり故に諸教に

〔ほむると〕ころおほくは彌陀にあり諸佛の

證誠かきりて念佛にたるたま／＼もこの勝

縁にあひて至心信樂のともからなく生死

(第二紙)

勤苦の本をぬき〔ま〕れにもこの本願に乘して

乃至十念する人かならず住不退轉の益を

成すこの證〔今〕眼前に炳焉なりこゝに秋津

洲相模鎌倉比企の谷岩藏寺に希代〔無雙〕

の靈像まします超世願王彌陀來迎の三尊

御たけ法の三尺〔なり〕世稱して〔かなやき〕

煩焼阿彌陀緣起詞書

ほ〔と〕けと号す天津古屋根の崇孫第八十四

代の御〔門〕順徳天王の御宇建保三年乙亥そのころ

京都に大佛〔師あり〕雲慶法印と号す〔世〕のきこゑ

人のほまれむかしのひしゆかつまを〔念〕〔もはち〕す故に

將軍右大臣家の召請によりて關東下向のきさみ鎌

倉の住人するの氏女まことの〔つほね〕千時季 雲慶に

對面〔して曰〕われつ〔た〕えきく阿彌陀如來

は諸佛の大悲〔にこえて〕五障の雲あつき女人な

りとも御名を〔唱へ〕はむかへむとちかひ給

なれば最後の本尊のために彌陀如來の像を

(第三紙)

つくりたて〔まつ〕〔と〕季來の宿願ありさい

わいいまこの願をはたすへしとてすてに

〔吉日良辰を〕あらひ〔さ〕〔め〕て約束するに法

印施主の發願を〔領掌〕をはりぬ〔以下餘白〕

(第四紙、第五紙、第六紙 繪)

(第二段)

(第七紙)

さて從僕を伊豆の國杣につかはしてみそ

木を〔とりはし〕むるにいさ／＼かも風波の難なく

到來すこのみそきにひきす千段そへて佛

師のもとへつかはすとて申けるは阿彌陀佛は

四十八の大願をおこして罪惡深重の凡夫愚

癡不善の女人をもすくひ給なれはおなし

くはかの誓願を〔表〕して四十八日に造立して

たまは覽と申て直物の外に金銀羽皮等の
たくひ日々不〔闕〕の所作としてこれをつかはし

けるほとに佛師の云むかしより造立佛像の人

おほしといへともかくのことく慇重の懇志

いまたなしとこゝろさしのまことなる事

を隨喜感歎して身のため人のためさらに

等閑の儀あるへからすとて日々に沐浴精

進して約束のことく首尾四十八日に造功お

はりぬ〔餘白ナシ〕

(第八、九、十紙 繪)

(第三段)

(第十一紙)

氏女新造の本尊をむかへいたてまつりて

先〔出〕〔居〕に障子帳をしつらひて安置したて

まつり日夜〔朝〕夕に香花燈明をそなえ恭

敬禮拜すかくて一兩年をへて〔家〕〔上〕

下〔の〕もの漸々にうる事ありけりおなし

き五年〔丁〕男女の眷屬等を召集して起請を

かゝせておの／＼失をまほるの中に萬歳と〔マ、〕

下法〔師〕〔あ〕りいかなる宿縁かはありけん行住

坐臥時〔節〕〔を〕き〔は〕す〔機〕嫌おあらはす西に

むかひ念佛して光明遍照十方世界念佛

〔衆〕生攝取不捨の文をとなへて目をとちたな

心をあはすしかりといえとも妄語ひとをわ

つらはし盜心こゝろに〔の〕まなし故に家内の

上下諸人この念佛をたとますその心本の不善なる事を忌厭す

(餘白ナシ)

(第十二、十三、十四紙 繪)

(第四段)

(第十五紙)

あるときこの法師(勸云)「今生は(夢)の世發心念(佛修行せよと勸めけるを後)見の女いのくま聞つ(物)けてやかて

主にかたりぬ氏女善惡きひしき女性にておほきにいかりて日ころうせぬる(物)はみなこの法師めかしはさなりけりとて下人源二郎(男)に

命していはくよく(ひふくめて)いましめておもてに火印をさすへしといふ(急用)あり

けるによつてわか身は澁谷といふところえいそきくたり(ぬ)
(以下餘白)

(第十六、十七、十八紙 繪)

(第五段)

(第十九紙)

源二郎男主命そむきかたきによりてこの

法師をひきいたし出居の縁のつかはしらにつよくいましめて(す)つわの水つきをあかくやきて

萬歳か左のかほさきに火印をさすときれいの事なれば聲をあけてあらかなしほとけた

すけ給も南無阿彌陀佛となへけるを同類(不審)のものはく何條ほとけの汝の様なるふ(不審)のものを

はたすけ給へきやといひて火印をつよく

捺をはりて翌日におもてを見るに火印の

あとさらになし主の女房かえり見たまはんときわか命をそむけりといふてわれさへ

不審をかたらん事うたかひなしとおもひてかさねて火印をさしぬ
(以下餘白)

(第二十、二十一紙 繪)

(第六段)

(第二十二紙)

さて主の女房澁谷よりかえりきたりて源次郎おとこに問ていはく萬歳に火印は

さすやいなやとこたへて命のことしと云々今日ひくれぬあけて見るへしとてふしお

はりぬその夜半もするほとに夢想のつけあり持佛堂の本尊(左)の御かほさきを

押て汝なんかゆえにわかおもてに火印をは捺そやとのたまひてなみたをなかし

まことに苦痛まします體なり氏女答てまうさくいかてかほとけの御かほに火印

をはさしたてまつるへきやとて夢中に神心驚動し臥床不安とおほえき
(以下餘白)

(第二十三紙 繪)

(第七段)

(第二十四紙)

氏女うちおとろきて身の毛よたちむねうちさはきあさましくおほえてすなはち井

より淨水をとりよせ行水してあたらし

き小袖なんときつゝ佛前に(誦し)跪(誦し)く障子帳をしひらきとしひたかくかくけて

拜見したてまつれば夢の所見のことくすしもたかはすひたりの御か(マ、)をさきに火印

のあと現在せりいよく怖畏を生して五體を地になけてなみたをなかし發露懺悔(悔)す
(以下餘白)

(第二十五、二十七紙 繪)

(第二十八紙 空白)

下 卷

(第一段)

(第一紙)

氏女良久ありて内にいり源二郎男を召て萬歳法師か火印おみんといふよて

萬歳をひきいたして見せしむるに火印のあとかたさらになしこゝにしりぬわか本

尊は萬歳法師にかはり給けりと覺悟(マ、)いよく悲喜むねにみち謁仰(湯)きもをくたく

このとき上下の諸人おもひあはせけるはこの法師の日來行(住)坐臥をきらは(す)時處

諸縁をゑらはす念佛して光明遍照の文を誦しける事實實の信心なりけりと感歎

してかかる罪濁不善の愚人なれとも念すればたすけ給は大悲の本願不捨(定)の誓約

なりけりとこゝに安心思(定)意なる人もあり

けるとなむいまこの念佛衆生攝取不捨の文
善導大師釋してのたまはく衆生起行日常稱佛

(第二紙)

佛即聞之身常禮敬佛即見之心常念佛

佛即知之衆生憶念佛者佛亦憶念衆生彼此三

業不相捨離故觀緣也文とこの意はたゞ念佛

衆生の三業と彌陀如來の三業とまたく一に

して異にあらすたとへば身體髮膚を父母

にうけたるゆえに念佛衆生の面に捺ところ

の火印すなはち彌陀如來の面にありけるは

如來の本意和尚の素意經釋ともに誠諦の

金言は一毫もあやまりなき現證なり

なをもるれを信せさらんや (以下餘白)

(第三、四紙 繪)

(第二段)

(第五紙)

われ女身として如此惡名末代に流布せん事

くちをしくおもひてしかしいまた外人の

しらさるさきに火印のあとをかくしてなかき

惡の聲をとゝめんにはとおもひて田樂か

つしにあひしりたりける光明坊といふ僧を

呵して上件の不思議を一々にかたりていかゝ

してこの火印のあとをかくさんやといふよてかの

僧かめかやより佛師を請してこくそをもて

疵をうめ上にはくをおしければなかれおち

頰燒阿彌陀緣起詞書

なかれをちしてすへてあとにかくれすもしゃく

とをす事廿一重ついにかくれすしてその

あとにいまに現在せりかの佛師當坐に重病を

うけて私宅にかえり九日といふけるに死し

おはりぬ

(餘白ナシ)

(第六、七紙 繪)

(第三段)

(第八紙)

これを隱密せん事佛意にそむけりとおもひ

てそのうちにはくをゝさすしてあまねく世間

に披露せしむるに貴賤上下參詣雲集

して門前いちをなし外廓まちをたつかゝる

嚴重生身の如來を私宅に同居したてまつ

覽事其をそれありいそき佛殿を造立せん

とて靈地をたつねけるところに比企の谷に

地形無雙の勝地あり田代の阿闍梨といひ

ける人の手よりこの堂地をこひうけて一字

の精舎を造立して岩藏寺と號して本

尊をうつしすゑたてまつりぬときのひと

この寺を火印堂とそ申ける (以下餘白)

(第九、十、十一紙 繪)

(第四段)

(第十二紙)

さてこの萬歲法師をは佛の本心に相かなへるもの

なりめしつかはん事も恐ある心地してなんちのいとま

をは心にまかすへしとゆるされをかふりて相模をゝ

いそといふ所の道のほとりにいほりをむすひ朝夕

彌陀の名印といふ物つくりて身命をつきい

よ一向專修の行人となり稱名無間に勤修しける

かある時宿中をめぐり人々にいとまこひなこりを

しみてわれ明日往生すへしといふきく人さらに

まこととおもはすしてあさけりあえりすてにさた

めける時剋ちかつきてあやしのしはのいほりとり

きよめなとして西のかへはなちのけて西方に

むかひてすこしも身にわつらふ事なくして高聲に

念佛申てねふるかこくにて往生しおはりぬ音樂雲マニ

ひゝき紫雲のきにめくり空花虛にちり異香室に

くんす諸人耳目をおとろかし行客たな心をあはせ

すといふ事なし (餘白ナシ)

(第十三、十四紙 繪)

(第五段)

(第十五紙)

そのうち氏女出家して法阿彌陀佛と号す

建長三季九月廿六日とし七十三にして

宿願のことくこの本尊を臨終佛として

五色のはたをひかえ端坐合掌して念佛數

十遍となへて禪定にいるかこくとして

往生しおはりぬ

(以下餘白)

(第十六紙 繪)

(第六段)

(第十七紙)

さるほとにこの源二郎男はまさしく如來のおもてに火印をさす因果撥無の惡人といへとも現在にかゝる不思議をみてかの萬歳法師は一生のあひた妄語偷盜をもて業として一分も慚愧ある事さらになしたゝ自身の善惡をかえりみす一向に念佛せしかはたちまちに現身には苦難をのかれ命終には往生をとく本願は物をきはぬ不思議なればわれらかことくなる愚癡不善のものゝたのみたてまつるへきはこの佛なりとてやかて夫妻ともに發心出家して堂の庭をはらひ香をたき花をそなへて一向專終のつとめおこたらさりけり (以下餘白)

(第七段)

(第十九紙)

源次郎入道かくて季月をおくりけるほとにつねならぬ世上のならひなれはいさゝかわつらふ心地ありていくほととなくしてかねて死期おほえて念佛のこゑとともにいきたえて往生の素懷をとけおはりぬ (以下餘白)

(第二十紙 繪)

(第八段)

(第二十一紙)

町の局の嫡女(ヤ、)藥師尼法名性如病患をうけて三日以前にかねて死期をしりこのほとけの御手に五色のはたをつけひかえつゝ念佛數十返となへて弘安元年五月十七日とし八十三にて端坐入滅しおはりぬおよそ氏女か一族親類所從眷屬あやしのしつのをしつめのにいたるまでこのほとけにちかつき縁をむすふたくひ往生をとくるもの翰墨にいとまあらず往生のころさしあ覽ひとたれか歸依をむなしくせんや (以下餘白)

(第二十二、二十三紙 繪)

(奥書)

(第二十四紙)

此繪不慮感得之間多年所奉所持也然此本尊十二所道場御座之由承及之際爲増利益所奉寄進彼道場也于時文和第四之曆暮秋下旬之候而已

法印權大僧都靖嚴

(副本奥書)

右光觸寺本尊之緣起舊本二卷在之畫工者不知其人之名詞書者爲相卿之筆跡也雖然紙墨損壞而文字等不分明因茲石川小左衛門吉但戒名尊稱院寶譽是閑歎彼本之破壞詞書遊行三十七代上人筆跡也畫圖共改之令寄附者也誠欲令知本尊之靈瑞於遐代之志甚深也施主存日書畫不調而沒後成仍亡靈即證無生果無疑兼學々總々之現益豈容恠之乎爲後證誌之畢

(印) 遊行三十九代

萬治三庚子年九月廿五日他阿彌陀佛
(印長方形重廓朱文「遊行三十九世」)

類
燒
阿
彌
陀
緣
起
詞
書

神
奈
川
光
觸
寺
藏

同
奥
書